



昨年までは長崎で研究

広島からウイーンに送られた被爆石



研究を通して世界とつながる

核を主題にした歴史研究がテーマ

視点によって異なる原爆をめぐる認識 万能ではない科学。人間視点から探究を

大学院人間社会科学研究所 准教授

中尾 麻伊香さん

2015年に東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程修了後、立命館大学衣笠総合研究機構、マックス・プランク科学史研究所、長崎大学原爆後障害医療研究所などで研究を行い、2021年から現職。

■きっかけ

父の実家が鹿児島県にあり、子どものときから知覧特攻平和会館などに行き、戦争の悲惨さを感じてきました。大学時代には映像を学び、戦争や貧困など社会の問題を伝える映像ジャーナリストになりたいという思いが芽生えました。ただ、映像をつくるには、社会のことを勉強する必要性を痛感、大学院修士課程に進学し、博物館における核の展示を比較研究しました。その際、膨大な核の歴史に引き込まれ、大学院の博士課程に進んだ後、核(放射能や原爆)がどのように認識されてきたのかを研究してきました。

■研究で見えてきたこと

科学知識は、万能であると捉えられがちですが、実は社会的な文脈のなかで形成され、語られていることが多いということです。例えば、戦前の日本では、ラジウム温泉が流行するなど、放射能は体によい影響をもたらすものと捉えられていました。

敗戦後も、米軍の占領下で原爆被害の実相はほとんど伝えられず、被爆地の人々も過去を忘れたい思いがあり、原爆被害は表立って語られず、過去のこととされていきました。

大きく変化したのは戦争終結後で、1954年に日本のマグロ漁船がアメリカの核実験によって被害を受けた事件を契機に、全国的な原水爆禁止運動が起こりました。

原爆被害の実相が知られるようになり、被爆者の援護が進んでいきました。しかし同時に、深刻な被爆者差別も生まれました。

このように、原爆や放射能の捉え方は、それらが危険だと考えれば、そのように切り取ることができますし、危険性が低いと考えれば、危険性を排除して切り取ることもできます。伝える側の視点で、流通する知識は大きく変わってくることを示唆しています。

■今後の研究課題

原爆被害をめぐる科学調査を、人

間の視点から捉え直すことです。科学は原爆被害の全容を捉えようとしてきましたが、それは不可能であり、歴史を作っているのは一人一人の人間です。科学が掬いきれない多様な声に耳を傾けていきたいと思っています。

例えば、原爆の人体影響を調べるため広島と長崎に設置された米国のABC C(原爆傷害調査委員会)の調査について、調査される市民はどういう感情を持っていたのか、被爆地の広島で学び教える研究者として、広島の人々の経験を学びながら、研究を進めていきたいです。

■これから

学生や、アーティストなど異業種の人たちと一緒に、原爆の記憶を掘り起こしながら、今の人たちに問う場をつくっていききたい、と思っています。社会や人とつながる研究者でありたい、と願っています。